

菊池川河口域の貝類に関する新知見

玉名市立有明中学校 2年 松井 尚子

1 はじめに

現在、菊池川河口域では、津波対策として堤防のかさ上げ補強工事が行われている。ここの塩生湿地には、特有の多様な生物が見られる。特に、貝類の多様性が非常に高い。この工事により塩生湿地特有の希少な生物相が壊滅、ひいては絶滅してしまう可能性が極めて高い。そこで、絶滅してしまう前に菊池川河口の塩生湿地に生息する生物相、特に貝類に着目し、生息状況を明らかにしようと調査を行うこととした。

2 研究の方法

去年は、1ポイントのみの調査であったが、今年は、更に10ポイントの調査地点を追加設置した。各ポイントにおいて、生息・生育する生物相（貝類層及び塩生植物相）を見つけ取りにより採取、調査した。貝類は、洗浄し軟体部を取り除き標本にした。可能な限り自分で同定したが、同定が難しい種に関しては、潮崎環境生物研究所の潮崎正浩氏に同定をお願いした。

3 研究の結果

今回調査した11地点の内、7地点で絶滅危惧種の貝類や塩生植物が確認された。内訳は、調査地点⑤で6種、調査地点⑥で12種、調査地点⑦で8種、調査地点⑧で6種、調査地点⑨で12種、調査地点⑩で11種、調査地点⑪で3種となった。特に、調査地点⑨の塩生湿地では、貝類だけで10種（内、生貝9種）、植物2種が絶滅危惧種にランクされていた。

4 研究のまとめ

調査地点⑨の環境が、貝類や塩生植物にとって、他では例を見ない非常に貴重な生息・生育環境であることを意味する。特筆すべきは、オカミミガイ科の4種の生育が確認されたことである。また、オカミミガイ類の本来の生息地は、アシ原の根元であるが、調査地点⑨では、フクド(キク科)の根元や石垣の付け根付近であり、しかも他に類を見ないほど多産していることがわかった。このことは、学術的にも極めて貴重は発見であり、新知見となったものである。

5 研究の今後

本研究の結果から、調査地点⑨の環境は、塩生湿地を生息環境にしている、特に貝類にとっては、聖域というのにふさわしく、今後において保護していかなければいけない貴重な場所であることが明らかになった。また、この場所は簡単にエントリーでき、塩生湿地の生物を観察することにも好適地である。ここを保護し、観察会を開催することにより、塩生湿地の生物の多様性や重要性を広く啓発することに大いに貢献できるものである。